

夢を叶える力！

奥野 史子	スポーツコメンテーター
奨励者紹介【おくの・ふみこ】	

大学生生活を振り返って

皆さん、こんばんは。ご紹介をいただきました奥野史子です。

今日ここに立たせていただきまして先ほどから聖歌を聴かせていただき、非常に敵かな気持ちといいますが、以前ここに入ったのは随分昔のことで、もう十年以上も前の、私が学生時代のときでした。まさかここに立たせていただいておりますということはあるとは思っていませんでした。今日は非常に光栄に思っております。短い時間ですけれども私の話の中でどこまで皆さんに伝えられることができるか、自信はあまりありませんが、お話をさせていただきたいと思っております。

私自身、大学に四年間在籍してまして、皆さんほど、たぶんキリスト教であったり、新島先生の教えというものを、本気で考えた時間というのはあまりなかったと思います。実は言い訳をするようなのですが、シンクロナイズドスイミングというものに、この四年間は全精力を注いでおりました。大学にはちゃんと勉強には来ていましたが、どちらかというと、自分自身の魂というのはほとんどシンクロの方に実は向いていたのです。というのは、私自身十六年間シンクロに携わってまして、皆さんがよく知るオリンピックを目標にやってきました。ちょうど大学二回生の時にバルセロナオリンピックに出るチャンスをいただきましたので、その練習で大学一回生、二回生の田辺キャンパスに行っていた間というのは、とにかく毎日、練習練習の日々だったのです。ただその練習練習の日々のなかで私が唯一心を洗われるというか、心許せるというか、シンクロ以外のところで力を充実させるというか、そういうことができたのが、田辺キャンパスであり、同志社のこの今出川キャンパスだったのです。実は私自身一般的な大学生活をエンジョイできたかといったら、そうではなかったような気がします。とにかくその日々の練習に追われていたということがあったのですが、ただその限られた時間を、フルには有効活用できたのだと思うのです。それは自分の時間を使う中で時間はすごく大事なものだと思うのですが、大学は四年間しかありませんでした。その四年間の中でシンクロも充実させ、そして大学に来て友人たちと語り合ったり、いろんな話をしたということが、私の人生のなかですごく大きな財産になっていますし、今、大学でその語り合った友だち、特にゼミの友だちなんかは今でも本当によい付き合いをしています。例えば、変な話、たとえばオリンピックでメダルを取ったとすると、私、奥野史子という人間以上にオリンピックメダリストってということが私の冠に付いてしまうんですね。そうすると人は、みんなオリンピックのメダリストというふうに見ることが多くなります。それでやっぱり多くの人がオリンピックのメダリストを目標に集まってきてくれるのですが、じゃあ実際に奥野史子という一人の人間を見てくれたかといったらそれは分からなかったですね。ただやはりその大学でオリンピックに出る前から過ごした友人というのはそのメダリストという冠を無視して私と付き合ってくれたのですね。ですから今でも本当にそういういい友人に支えられて、それがその大学時代の私の一番の財産だったと思います。

大学を卒業してから気付くことというのは本当にたくさんあって、卒業してからやっぱりもったいないことをしたな、もっと授業にたくさん出ればよかったとかチャペル・アワーに出ておけばよかったとか、いままさに思うことなのですが、社会人になってから客観的に大学時代のことを考えるようになりまして、もう一度やはりちゃんと勉強をしたと思いました。大学時代というのはどこかに甘えがあったのだと私自身思います。両親に学費を払ってもらい、大学に来ていた。やっぱりそれは、いろんな甘えのもとに生きていた四年間でもあったと思うんですね。私はシンクロをやっていたということがあったのですが、それ以外にもいろんな甘えがありました。ですから大学を卒業してから六年後に、もう一度勉強しようと思って私は同志社大学の総合政策科学研究科というところに社会人入試で受けることを決意しました。もちろんその当時は東京で仕事をしていたので、非常に忙しかったり来たりと大変だったのですが、もう一度大学で学びたいという意志をもってやっていました。

挫折をして気付くこと

私は、このまだまだ短い人生なのですが、いつも目標や夢をもっています。シンクロをやっていたときは、それがたとえばオリンピックで、オリンピックに出るといのは本当に夢だったんです。小学校六年生からの夢でした。それが実現するためには日々の目標、そして一カ月後、一年後、二年後というスパンを区切って自分のなかで明確に目標を作ってやってきました。その目標をひとつずつクリアしていくたびにその喜びがありますが、やっぱりクリアできないとき、スランプに陥るときというのがたくさんあって、いちばん大きなスランプというのが一九九三年、今から十二年前になるのですが、ワールドカップという大会でオリンピックの翌年にメダルを取れなかった時期でした。皆さんよくテレビでシンクロというのをご覧になると思うのですが、シンクロという競技は必ずといっていいほどメダルを取って帰ってきます。国際大会においてです。その中で私は一度だけメダルを取れないことがありました。それは日本の代表としてその世界で戦っていく選手としては、今までの私たちの先輩方が築いてきた歴史、メダルを取り続けてきた歴史を、そこで一端崩してしまっただけに、今までの責任は非常に大きかったのですが、そこでやめる、やめたいと思ったのです。正直、もうこんなに頑張ってもメダルを取れなかった、評価されなかったことについて落ち込み、やはりやめたいなと思っていました。納得できないという思いもありましたし、ただそこでやめてしまっただけで、この後の長い人生で、今やめたらきっとこの後頑張りが続けないのではないか、この後挑戦することができないのではないか、それを達成することができなくなるのではないか、という思いがあったのです。

ですからとにかくもう一度挑戦しよう、だめでもいいから挑戦しようと思いました。そしてとにかくシンクロの練習時間というのは非常に長いので、一日プールの中だけでも十時間以上入りますし、上に上がったらウエイトトレーニングやダンスのレッスン、表現力を養うためにポイストレーニングなんかもするんですね。そういうことをやりながらとにかく今できる一杯のことをやる。その一瞬一瞬をとにかく大切にすることを、そのときに養い直した一年だったんです。ただやっぱりそのときの心の支えになったというのは、悔しいという思いをしたことでした。初めて大きな負けをして目が覚めたというか、いろんな言葉がそのとき耳に入ってくるようになったのですね。ですから負けて気が付くこと、挫折をして気が付くこと、失敗して気が付くこと、そのときに、じゃあそれで自暴自棄になるのではなくて、何をやるかということが一番大切で、人生よくいわれる山あり谷ありなのですが、やっぱりその谷が深ければ深いほど山になったときの喜びはひとしおだと思っております。とにかくそのメダルが取れなかった年というのは、その前の年にメダリストとしてメダルを取って帰ってきたのですが、メダルを取れなくなった途端に、メダリスト・奥野史子を見ていた人は、そっぽを向いてしまいました。けれどもそのときに私を支えてくれた人たちに感謝をして、とにかく支えてくれた人たちのために、そして自分のために頑張ろうと思って、もう一度、一から、基本からやり直した一年だったんです。その結果、次の年に世界選手権という大会で、ローマで銀メダルを獲得することができました。シンクロというのにはソロとデュエットとチームというのがありまして三つの演技があるんですが、ソロは一人で、デュエットは二人でチームは八人で演技をするのですが、そのソロで初めて日本選手としては初めての銀メダルを取ることができた大会でした。そのときに実は、今までシンクロというのは全ての人が氷からあがってきたら笑顔だったのです。なぜかというその審判員に対しての印象であったり、余裕であったり、余裕差であったりというものを印象づけるために皆さん笑顔なのです。ただそのとき、人がやっていないことや今までになかったことを表現し、新しく壁を打ち破らなければ勝てないということで、「夜叉の舞」という演技をやりました。「夜叉の舞」は夜叉のごとく鬼のような形相で水中からバーンと飛び上がってくるのですけれども、まあそれはそれは賛否両論でした。新しいことをやる何事も人は賛成したり、反対したりするもので、ただその前年負けた時に私のことを本当に親身で支えてくれた人たちというのは、それをやるべきだといってくれたのです。その人たちの言葉を胸に、とにかく新しいことに挑戦して自分が中途半端では絶対にそれは成立しないので、とことんまで自分がその夜叉になった気持ちでした。夜寝たら夢を見て、朝起きたら涙を流していたこともあったのですが、それぐらいとにかく自分がそれになりきる気持ちで演技することに集中しました。そうしたことによって、最終的には銀メダルをいただくことができたのですね。とにかくその時、自分自身を信じることで、自分を支えてくれる人を信じることで、そして一番学んだことというのは自分が挫折したときとか、スランプしたときにどうするかということ。何かをつかんで立ち上がる。ただでは立ち上がらない。何かをつかんで、その辺の雑草でも何でもいいです。つかんで立ち上がる。そして心をオープンにすること、いろんな人の話を聞くこと、いろんなものに目を向けること、五感をフルに働かせること、というのをやはりすごく学びました。

夢を叶えること、自分を信じること

やはり夢を叶えることは、とにかく信じることから始まると私は思っています。自分を信じること、自分を好きになること。自分の嫌いだと思う部分は実はすごく自分のチャームポイントでもあると思うんですね。そういう自分をとにかく好きになることが夢への第一歩になるのではないかなと思います。私自身もう今、子どもがいて、二歳の子を抱えながら仕事をしつつ、まだまだ向上心をもって頑張りたいなと思っています。今、大学院の総合政策科学研究科の修士課程までは修業したのですが、その後の続きとして博士課程を頑張りたいなと思っています。いつになるかわからないですが、早ければこの春の受験に間に合えば頑張りたいですし、間に合わなければ来年になるかもしれないのですが、また近々皆さんとここではなく私がそっちらに座っている皆さんと同じ立場でお話を聞いているかもしれないし、キャンパスに立っているかもしれない。とにかく同志社で学んだこと一番私がよくやったと思うことが、「自由」なのです。それは、自由は好き勝手に楽をすればいいということではなくて、自由だからこそ自分自身を守り持って、自分自身を見つめ直して、自分のことを考える時間がこの大学にいる間の時間だと思っています。そういう時間をまた私自身取り戻すためにもしっかり考え、もう一度大学に戻りたいなと思っています。チャンスやそういうものは自分でやはり作っていくものだと思いますので、皆さんも今大学で学んでいる時間を本当に大切に一瞬一瞬を無駄にしないように頑張ってくださいなと思います。ここに来ていらっしゃるという時点で、非常に私は皆さん前向きだと思って、私の学生時代からすればいぶん素晴らしいと思うぐらいなのですが、もう一層この今いる時間を大切に生きているということを感じて学生時代を過ごしていただきたいなと思っています。今日はどうもご清聴いただきましてありがとうございます。